

民話

— 東北文教大学民話研究センター —

発行 東北文教大学
民話研究センター

〒990-2316
山形市片谷地515
東北文教大学附属図書館
TEL 023-688-7544
メール library@t-bunkyo.ac.jp

「民話」を生きる

山形大学 教授 森岡 卓司

この数年、二〇世紀の地方文化運動をテーマにした研究会が続いている。先日、その企画のひとつとして、西会津の山村を舞台にして地域づくりに取り組む人々の様子を撮影したドキュメンタリー映画（松井至監督「奥川・未来の結」二〇二四）の上映会を開催した。どうしてこの研究会で地域づくりの映画をとりあげたか、というと、この映画制作プロジェクトが、「つぎの民話」と名付けられていることに関心を持ったからだ。

この映画のプロデューサーは、山形県朝日町のゆるキャラ「桃色ウサビ」の生みの親として知られる佐藤恒平さんで、彼は、「つぎの民話」というネーミングに、「地域の中で起こっていることを、その地域に住む人が民話（他人に話したくなるようなその地のオリジナルの話）のように語ってくれたらという願い」を込めた、と説明している（「地域で撮って地域で観たい映画づくりの話①」https://sotokotoonline.jp/sotokoto_pen_club/25426/）。この説明を聞いただけでは私自身もよくわからなかったのだが、上映会の際に、映画本編とあわせて、本編が完成した際に映画出演者を含む地域の人たちを学校の教室に集めて行われた試写会の様子も動画で見ることができ、とたんに腑に落ちる思いがした。映画を見終わるやいなや、もはや待ちきれないかのように我先に語りだす地域の人々は、なにか特別な、過疎化を解消する特効薬のようなアイデアを披露しているわけではない。語られる内容のほとんどは、ありがちな、抽象的にすら聞こえる感想や思いつきのたぐいにも聞こえるのだが、しかし、彼ら彼女らはとても真剣に、思いを込めてそれらを語り合う。大事なものは、語られる内容ではなくて、語ることそのものの方なのだ、ということが、画面からこの上ない説得力を持って伝わってくる。

* *

「民話」という言葉は、昔からひろく使われてきたもの、というわけではない。一九五〇年代の日本に生じた「民話ブーム」と呼ばれる現象によって、民俗学の理論によって定義された「昔話」や「神話」、「世間話」といった言葉に代わり、「民話」とい

う名称が一般の認知を得て、現在のような用いられ方をすることになった、というのが定説である。ブームの火付け役になったのは木下順二の戯曲「夕鶴」（一九四九）だが、その木下を中心とした「民話の会」が、『民話の発見』（一九五六）という論集を刊行している。

会に参加した多くの研究者や劇作家らが、それぞれに民話についての知見を披露しているこの論集からは、当時の興奮や熱気がありありと感ずることができるとは、そこに寄せた文章（「民話の世界」）の中で木下は、「民話」という言葉を、本来の「民間説話」の略語として理解するのではなく、「民衆の話」の略称として読み替えることを提案している。この提案が広く受け入れられたとするならば、「民話」は木下の造語だといっても過言ではないだろう。

もちろん木下は、単に看板を掛け変えただけではなく、「民話」という言葉に新たな要素を盛り込んでいた。彼によれば、民話とは「少しづつ新しい知恵をつぎこまれながら、少しづつふくらまされながら語りつがれて行く」もの、「自然に、複数の人々によって生み出されゆたかにふとて行く」ものである。言い換えれば、人がそれを語るたびに作り変えられ、あらたに生まれる話としてあるところに、木下は民話の特質を見ていた、ということでもある。

これは、木下の独りよがりな思い入れ、というわけでもなかった。敗戦と占領という政治的なカストロロイを経験した直後の日本社会では、絶るべき新たな権威を探すのではなく、民衆が本来持っていたはずの生きる知恵や力を再び発見し、獲得することが強く希求されていた。この時代に、木下の定義する「民話」に向けて熱い視線が注がれたのも、話を作り変えてきた過去の経緯の中に、あるいは話が生み出されていくこれからの過程の中に、そうした知恵や力を見いだすことが可能ではないか、と期待されたからだった。

しかし、後の民話研究において「再話性」と呼び直されたこの特質は、実は、民話の理解を複雑にし、文化資源的な価値評価をかえって難しくした、という側面を持っている。語られるそのたぐいに作り変えられるのなら、変化の過程を精確にたどることは不可能に近い。だとしたら、そこに込められた民衆の知恵とは何なのか特定することも、残すべき正しい民話のかたちとはどれなのかを決めることも、ともに難しい、ということにもなる。民話は、たとえば芸術作品を評価するのと同様の方法で内容を分析し、価